

社会变迁与共和国同龄人的生命历程

歴史変動と「共和国同龄人」のライフコース

辺静 著



世界出版社



歴史変動と「共和国同齡人」のライフコース

辺静 著



世界・人文出版

出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

社会变迁与共和国同龄人的生命历程: 日文/边静著. —北京: 世界知识出版社, 2015.5

ISBN 978-7-5012-4937-4

I. ①社… II. ①边… III. ①. 社会变迁—研究—中国—现代—日文
②中国历史—现代史—研究—日文 IV. ①D668②K270.7

中国版本图书馆CIP数据核字 (2015) 第110613号

书 名 歴史変動と「共和国同龄人」のライフコース

社会变迁与共和国同龄人的生命历程

作 者 边 静

出 版 者 世界知识出版社

社 址 北京市东城区干面胡同51号 邮 编 100010

电 话 010-65265923 (发行) 010-85119023 (邮购)

网 址 www.wap1934.com

经 销 新华书店

责任编辑 罗养毅 李 刚

责任出版 刘 喆

责任校对 张 琨

照 排 北京世知文化创意有限公司

印 刷 北京京华虎彩印刷有限公司

开 本 970×640毫米 1/16 16½印张 220千字

版次印次 2015年5月第一版 2015年5月第一次印刷

书 号 ISBN 978-7-5012-4937-4

定 价 35.00元

* 版权所有 侵权必究

前 言

中华人民共和国成立以来，60余年的岁月荏苒流逝。伴随着中华人民共和国的成立出生的一代人——共和国同龄人，则与新生的共和国一道，见证了轰轰烈烈的社会主义建设，也经历了大跃进、自然灾害、文化大革命、改革开放、市场经济发展等诸多历史变迁。他们个人的生活史与社会变迁密切相关。正因为如此，他们被称为“生在红旗下长在红旗下的一代”、“上山下乡的一代”和“下岗的一代”。而如今，作为第一代独生子女的父母，他们正在经历上有老、下有小的“三明治”时期。本书通过对32名“共和国同龄人”的深度访谈，揭示了中国宏观的社会变迁与微观的个人经历之间的动态联系。同时，本书也是记录这一代人的生活史，如实呈现他们的经历与感悟、欢笑与泪水的纪念性著作。

本书使用社会学领域中“生命历程”的研究范式。生命历程理论，主要强调宏观的社会变动与微观的个人经历之间的相互作用，其实证性研究在欧美和日本有较多先例。1974年，生命内历程研究的里程碑式著作《大萧条的孩子们》（*Children of the Great Depression*）问世。这部著作考察了20世纪初的经济大萧条给处于不同年龄阶段的研究对象的童年期，青年期乃至成年期的发展带来的不同影响。之后，生命历程研究蓬勃展开。如Hareven聚焦于个人的年龄和时代这两个时间概念，研究了美国社会工业化兴盛期家庭的作用。Giele讨论了个人在社会变革中发挥的“自下而上”的推动力。同时在欧洲，巨大的社会变迁也为生命历程研究提供了基础。其中，东德西德合并前后、前苏联解体前后的生命历程研究引人注目。如Weymann讨论了东德在与西德合并之初劳动力市场与职业结构的深刻变化和在此期间职业学校毕业生与大

学毕业生所经历的不同的职业生涯模式（先就业后失业和先失业后就业）。爱沙尼亚学者Titma 和Tuma则通过分析跟踪调查数据，发现1991年前苏联解体后，转为实行市场经济体制地区的青年人社会经济地位上升，而仍在继续计划经济体制地区的青年人，社会经济地位出现下降趋势。亚洲方面，20世纪80年代，日本家庭社会学先驱之一森冈清美主持的《家庭与生命历程的日美比较研究》和之后出版的《日本人的生命历程》将生命历程理论和其研究方法率先引入日本家庭社会学界。80年代后期开始，以早稻田大学社会学研究室为主的研究团队开展了一系列的调查研究。其中，《煤矿工人的闭矿离职与职业生涯的再建构》研究持续了十余年，2007为止已刊行研究报告10册并发表了丰富的论文成果。另外，2003—2007年，御茶水女子大学主持开展了21世纪COE项目“从诞生到死亡的人类发展科学”《关于中老年女性的重要转变和社会支援的长期研究》。该项目采取跟踪调查方式，研究了日本女性由中年向老年过渡阶段的生活状态，所面临的现实困难和如何实现顺利过渡等问题。中国于20世纪90年代末引入该理论视角，李强、郑路，周雪光、侯立仁等都曾通过大量调查数据探讨国家政策和个人生命历程之间的关系。胡薇则运用对15名老年人的深度访谈资料探讨了老年人分化过程中累积的异质性，为通过质性资料研究生命历程提供了较好的参考。不过，不论国外还是国内，生命历程研究都存在对生命历程四个要素的综合运用不够充分以及偏向大量调查的研究方法，使得事件的因果关系不够明晰等不足。本书是通过质性访谈调查，以共和国同齡人为研究对象的系统、全面且细致的生命历程研究。由于自新中国成立后短期内的巨大社会历史变迁，中国人的生命历程备受世界各国研究者的关注。本书的出版能够在一定程度上丰富中国的生命历程研究，并为世界范围内的生命历程研究提供参考。

本书尝试将个人的人生轨迹分解为教育经历、职业生涯和家庭生活经历，同时注重三者间的交叉和统一。通过对生命历程研究的四个要素（时空中的位置、相互关联的人生、个人主观能动

性、时机)的综合运用,力图科学全面地把握个人的生命历程。另外,本书也关注了男性和女性生命历程的不同,探讨了女性生命轨迹的特点。比如,在职业生涯方面,这一代男性工作单位的变动与社会、历史因素联系紧密,而女性的单位变动则更多是由于结婚、生育、育儿等家庭经历上的生命事件引起的。

另外,本书以笔者留日期间撰写的博士论文为基础,同时融合了教育部人文社科基金项目的研究成果。本书第一阶段的研究获得了“日本富士施乐小林节太郎纪念基金”、御茶水女子大学21世纪COE“从诞生到死亡的人类发展科学”公募研究的资助。本书第二阶段的研究是笔者主持的教育部人文社科基金青年基金项目《社会变迁与共和国同龄人的生命历程》(11YJC840001)的重要部分。借此书出版的机会,向在求学和研究道路上给予过我帮助的老师、基金以及机构表示感谢。同时,我还要感谢接受我访谈的32位叔叔阿姨。如果没有他们的热心配合,没有他们虽然朴实无华却是最真实的语言的支撑,我是不可能完成这部书的。对这些叔叔阿姨的访谈和跟他们10年来的交往,凝聚成了这部书,也构成了我生活的一部分。

本书笔者 迈静

2015年4月

目 録

前 言.....	1
はじめに.....	1
第 1 章 ライフコース研究の成立・展開・受容.....	7
1—1. ライフコース研究誕生の背景.....	7
1—2. ライフコース研究の展開.....	9
(1) 初期のライフコース研究.....	9
(2) ライフコース研究の展開.....	12
1—3. ライフコース研究の方法.....	18
(1) ライフコースアプローチの視点.....	18
(2) ライフコース研究の方法.....	21
1—4. 日本におけるライフコース研究の受容と展開.....	23
1—5. 中国におけるライフコース研究の受容と展開.....	26
(1) 個人のライフイベントのタイミングと帰結に 注目した研究.....	26
(2) 歴史的イベントのライフコースへの波及効果に 注目した研究.....	29
第 2 章 「共和国同齡人」へのライフコース的接近.....	34
2—1. 中国社会の歴史変動.....	34
(1) 人口変動.....	34
(2) 政治・経済.....	37
(3) 社会・文化・教育.....	46
2—2. ライフコース論からみた「共和国同齡人」.....	51

(1) 子ども期の経験	52
(2) 教育キャリア	52
(3) 職業キャリア	54
(4) 家族キャリア	58
第 3 章 研究の目的と方法	65
3—1. 研究目的	65
3—2. 調査の概要	67
(1) 調査対象と調査時期	67
(2) 調査方法	70
(3) 調査項目	70
(4) 調査方法の長所と短所	71
(5) 研究枠組み	76
3—3. 調査対象者のプロフィール	80
第 4 章 子ども期の経験	90
4—1. 生活の困窮	90
4—2. 親の社会的地位の多様性	94
4—3. 社会経験	96
第 5 章 「共和国同齡人」の教育キャリア	101
5—1. 教育分断のタイミング	101
(1) コーホート間の差異	101
(2) コーホート内の多様性	111
5—2. 教育分断に対する主観的認識	114
(1) コーホート間の差異	114
(2) コーホート内の多様性	120
5—3. 教育キャリアアップの有無	120
(1) コーホート間の差異	120
(2) コーホート内の多様性	131

第6章 「共和国同齡人」の職業キャリア	133
6―1. 職業キャリアの類型化と特徴	133
(1) 単位間移動の有無	133
(2) 職種移動の有無	134
6―2. 下放と初就職	140
(1) コーホート間の共通性と差異	140
(2) コーホート内の多様性	147
6―3. 単位間移動	149
(1) コーホート間の共通性と差異	149
(2) コーホート内の多様性	158
6―4. 職種移動	163
(1) コーホート間の共通性と差異	163
(2) 女性の職種移動の特徴	164
(3) コーホート内の多様性	167
(4) 職種移動のパターンと主観的認識との相違	169
6―5. 初離職	170
(1) コーホート間の共通性と差異	170
(2) 女性の身分を変更する上での退職	174
(3) コーホート内の多様性	175
6―6. 再就職	178
(1) コーホート間の共通性と差異	178
(2) 家族員の看護・介護と女性の再就職	181
(3) コーホート内の多様性	183
 第7章 「共和国同齡人」の家族キャリア	 185
7―1. 結婚・出産のタイミング	185
(1) コーホート間の共通性と差異	185
(2) 結婚年齢の多様性	188
(3) 子どもの数の多様性	189

7—2. 結婚後の居住キャリア	190
(1) コーホート間の共通性	190
(2) 男女間の差異	190
(3) コーホート間の差異	191
(4) コーホート内の多様性	193
7—3. 夫婦関係の現状	194
(1) コーホート間の共通性	194
(2) コーホート間の差異	198
7—4. 親子関係の現状	200
(1) コーホート間の共通性	200
(2) コーホート間の差異	207
 第8章 総括	 210
8—1. 「共和国同齡人」のキャリア展開	210
(1) 教育キャリアと職業キャリア	210
(2) 教育キャリアと家族キャリア	214
(3) 職業キャリアと家族キャリア	217
8—2. 歴史変動と「共和国同齡人」のライフコース	218
8—3. 本研究の意義と今後の課題	224
(1) 本研究の意義	224
(2) 本研究の限界と今後の課題	226
 参考文献	 227
謝 辞	247

はじめに

1949年の中華人民共和国の成立以降、60年の歳月が流れた。中華人民共和国成立前後に生まれた「共和国同齡人」^①と呼ばれる人びとは、新中国建国、大躍進、自然災害、文化大革命、改革開放や改革加速など、歴史事件に彩られた激動する半世紀を生き抜いてきた。彼らは「赤旗のもとで生まれ育った世代」として誕生し、社会主義国家のもとで順調な成長と明るい将来が約束されていた。しかしその後、彼らは幾たびもの歴史変動を

① 「中華人民共和国と同じ年齢をもつ人びと」を言い表す言葉。文学作品の題材によく用いられる。明確な定義はないが、狭い意味では新中国建国の1949年に生まれ、新中国の歴史とともに人生を歩んできた人びとを指す。新中国建国60周年（2009年）を記念するために、中共党史出版社は『共和国同齡人』叢書の編集を計画し、2008年に国民に対して個人の経験をめぐる原稿募集を行った。この募集要項では1948年11月から1950年6月に生まれた人が「共和国同齡人」とみなされた。本研究では、歴史時代と年齢の2つの意味を包含する「共和国同齡人」という言葉を借りて、やや広い意味で、新中国とほぼ同年齢の1940年代後半から1950年代にかけて生まれた人びとを指すこととする。

経験し、「文革または上山下郷^①の世代」「下崗^②の世代」としてその人生の苦難が強調されるようになる。彼らは、自分の生活史を全体社会の変動と密接に結びつけた、あるいは結びつけられた人たちである。とりわけ、子ども期に遭遇した文化大革命は、彼らのその後のライフコースを強く方向付けてきた。それゆえ、彼らが歩んできた人生の軌跡は、諸個人の人生の変化を大きな歴史的・社会的変動と連結して理解するライフコース研究の恰好の素材を提供している。

もう一方で、個人は、ただ受動的に社会から影響を受けるだけでなく、能動的に社会に対応し、社会に変化をもたらす (Giele and Elder, 1998=2003) 存在でもある。こうした視点からも、「共和国同齡人」の経験は、ライフコース研究の興味深い対象である。

「共和国同齡人」は新中国の第一次ベビーブーマー（20世紀40年代末—50年代末）として生まれた。第二次世界大戦後のアメリカのベビーブーマー世代や日本の団塊世代に類似し、彼らはそれぞれのライフステージに入る度に全体社会に影響を与え、歴史変動を自らつくりだしてきた人びとでもある。例えば、60年代末から始まった知識青年の下放は、教育課程にあっ

① 「上山下郷」運動は、文化大革命期間中の紅衛兵運動が沈静化した1960年代末期からピークを迎える。1968年12月22日、毛沢東が「人民日報」で、「知識青年が農村に行って、貧農、下層中農の再教育を受ける事が必要である」と指示した。大量の若者が農村や山村、僻地へと向かい、その数は70年代末までの約10年間で1600万人以上にものぼったとされる。こうした政策によって、多くの青年は教育の機会を奪われ、国の教育は停止、崩壊した。なお、中国語の「上山下郷」運動は、日本語の「下放」と訳されることが多いため、本研究も以下では、「上山下郷」運動を表す場合に「下放」を使用する。

② 「下崗」は90年代以降、企業が余剰人員を削減する方法の1つであり、レイオフと訳される場合が多い。詳しくは第2章第1節（pp. 26—28）をご参照ください。

た彼らの就職難の解決策でもあった。文革の終息にともない、下放先から都市に帰還した彼らは、新たな就職難や結婚難、住宅難を巻き起こした。また彼らは、戦後における新たな文化の旗手としても知られている。同世代のなかには、十年にわたった文化大革命期の経験が、人びとの生活や心にかくに深い傷痕を残したかをテーマにした数多くの文学作品を発表した人たちがいる。これらは「傷痕文学」^①と称され、中国文学史上に新时期文学の開始を告げたとされている。

さらに、家族を形成し、子どもをつくろうとする時期に、巨大な人口集団である彼らは、結果的に晩婚政策や一人っ子政策の実施を促した。また、彼らが企業改革や人員削減の主たる対象として、単位^②から切り捨てられた後、職場の福利厚生への代わり新たな社会保障制度の形成と整備が急務として要求されるようになった。彼らが高齢期に入ろうとする現在、中国では少子高齢化が欧米や日本以上の速いスピードで進行し、「豊かになる前に老いる」社会に生じるさまざまな問題への対応が求められている。

第一次ベビーブーマーとして生まれた「共和国同齡人」を対象とし、ライフコースアプローチを用いた研究はいまだに少ない。そのようななかで、90年代後半から歴史、文学ないし社会学などの諸分野において「老三届」^③研究が展開された。社会

① 劉心武の『班主任』、盧新華の『傷痕』、葉辛の『磋砣歲月』などはその例として挙げられる。

② 企業や官庁、学校等人々が所属する職場の総称。計画経済時代、単位は単なる生産組織ではなく、従業員や職員の生活に必要な行政サービス・教育・医療・福利厚生・治安等の社会的機能を併せもっている。しかし、近年は企業形態の多様化や都市部への人口移動が進んだ結果、単位制度が機能を以前ほど果たせなくなってきた。

③ 文化大革命が開始した1966年5月に、中学校1年、2年、3年と高校1年、2年、3年にいる生徒のこと。

学的研究としては、紅衛兵運動の主な担い手、下放された知識青年の中核たる「老三届」の人生が、文化大革命を主とする中国の歴史変動により翻弄される様を実証的に明らかにした研究（葛, 1999；金, 1998）が示唆的である。

しかし、これらの研究は、文革と遭遇したタイミングの相違による「老三届」内部の多様性について、系統的な分析をしていない。また、文革が開始した当時、まだ中学校に進学していなかった一部のベビーブーマー世代を研究対象から排除したところに、限界があった。例えば、同じく「老三届」であっても、1966年に文革が開始したときの高校3年生と中学校1年生とでは、教育レベルや学力の差が大きい。こうした差異は彼らのその後のライフコース展開にも累積的に影響を及ぼしたものと考えられる。また、1966年にまだ小学生であった人びとの教育キャリアは、文革の10年間と重なる部分も大きい。彼らも「老三届」と同様に、あるいは「老三届」以上に、文革やその後の歴史変動からインパクトを受けた可能性がある。

したがって、新中国の歴史変動とそれを経験してきた人びとのライフコース展開との相互関連をみる際に、上述したような「ポスト老三届」も視野に入れるとともに、「老三届」に適用された枠組みにとらわれず、新たな視点で同年齢層を分類し、詳細に検討する必要がある。本研究では、彼らを3つのコーホートに分け、とくに文化大革命と遭遇したタイミングの違いが彼らのライフコース展開にどのように作用し、各コーホートはどのように歴史変動に能動的に対応したのかに注目したい。

また、歴史変動のインパクトと個人の能動的対応との関連を考察する際に、コーホート概念による分析だけでは十分とは言えない。性別によるその影響関係の違いにも注目する必要がある。新中国の社会主義国家体制のもとでは、「女性は天の半分を支える」というスローガンのもと、性差を意識的に否定する風潮がみられた。しかし同時に、旧体制のもとで優勢な規範で

あった「男尊女卑」、「男は外、女は内」も根強く残存しており、とりわけこの時代を歩んだ女性は、相矛盾する価値規範のなかにおかれていた。果たして、彼女らは法律上で定められた「男女平等」をどのように受け止め、実践してきたのか。そこに男女間の差異がみられるのか。さらにその差異は、一貫して存在してきたのか、それとも改革開放、とくに市場経済の全面導入以降に生じた新たな現象なのか。こうしたジェンダー視点に根ざす一連の問いについても解明したい。

以上の理由から、本研究では、文化大革命下で子ども期を過ごした「共和国同齡人」の男女を対象にするインタビュー調査に基づき、建国後の一連の歴史変動と彼らのライフコース展開の相互関連を、ライフコースアプローチにより詳細に明らかにしていく。

本書は次のような構成をとる。

第1章では、ライフコース研究の成立とその視点と方法を紹介した上で、欧米・日本・中国におけるライフコース研究の受容と展開を概観する。

第2章では、新中国建国後の歴史変動の大筋をたどり、既存の統計的データなどを用いて「共和国同齡人」の人びとの集合的なライフコースを描き出す。

第3章では、本研究の目的とインタビュー調査の概要を述べ、本研究の研究枠組みを示す。

第4章から第7章は、本研究の実証研究の部分である。

第4章では、対象者の幼いころの家族キャリア上の経験、文化大革命を含む社会的体験、そしてそれらの体験に対する主観的な意味づけについて簡単に紹介する。

第5章では、対象者の教育キャリアを教育分断のタイミング、教育分断に対する主観的認識、教育キャリアアップの有無という3つの側面にわけ、3コーホートのキャリア展開をたどる。そ

の上で、教育キャリア上の男女差を考察する。

第6章では、対象者の職業キャリアを類型化した上で、コーホート別の語りに注目し、下放と初就職、単位間移動、職種移動、初離職、再就職などの諸側面から構成される職業キャリアの形成メカニズムを考察する。そのなかで、職業キャリアにおける男女差を析出する。

第7章では、家族キャリア展開の特徴を、結婚・出産のタイミング、結婚後の居住キャリア、夫婦関係および親子関係の現状に分けて考察する。また、それぞれの特徴を踏まえ、彼らの家族キャリアの展開が歴史変動や自らの教育キャリア、職業キャリアとどのように関連しているのか、そしてそこには男女差があるのかを検討する。

第8章では、本研究の知見を要約して総括的な議論を行った上で、研究の意義と今後の課題について述べる。

第1章 ライフコース研究の成立・展開・受容

1—1. ライフコース研究誕生の背景

ライフコースアプローチは1970年代の欧米において誕生した。ライフコースアプローチの成立は、近代という時代の成熟に深くかかわっている。近代、すなわちモダニティとは、17世紀に封建的なヨーロッパにおいて確立され、20世紀に入るとそのインパクトが世界・歴史的となっていた制度および行為の様式である（Giddens, 1991=2005）。また、モダニティは産業化、都市化、合理化、官僚制化、民主化、資本主義の興隆、個人主義の確立と拡散、業績主義的な動機づけ、および理性と科学への強い信頼を基盤にしている（正岡, 1999）。

しかし、20世紀後半になると、産業社会の進展にともなうさまざまな問題が浮上するとともに、人びとの「科学」、「進歩」、「民主主義」に対する信仰が揺らぎ、また、それまで規格化、標準化されていた労働様式、核家族の生活様式も、男女の役割に対する認識も変わり、生産と再生産の関係が流動的で多様なものになりはじめた（Beck, 1986=1998）。家族研究の領域では、平均的でモーダルな家族を対象にしていたライフサイクル論の限界が露呈し、「家族」よりも「個人」を単位として、家族は個人の生活にかかわる一集団として捉えるような新たな研究視点や方法の転換が求められている（今津, 1995）。このような歴史時間および社会的趨勢のもとで、人びとの人生に現れた変化を突き止め、これを説明するための科学的アプロー